

日本民俗学と民具研究の軌跡 ～民具研究をめぐる柳田國男と渋澤敬三を中心に～

鈴木通大

はじめに

今日は、「民具」の研究が昂揚してきている時期だといえるだろう。このことは、出版物の刊行などをみてもうかがうことができる。また特に「郷土館」、「博物館」などの建設ラッシュにより、民具=有形民俗資料に直接携わる者が増えて、民具研究が盛んになってしまっていることも起因のひとつになっているといえよう。

ところで、民具研究は、民具学として民俗学の分野から独立させて研究を進めていくのがよいのであろうか。筆者自身は、以前から民俗学の範疇で、民具を研究していくことが有意義であるという基本的立場を志向してきた。^{注(1)} この立場を墨守するのは、筆者が民俗学の中でも、どちらかといえば、精神文化^{注(2)}の分野を専攻してきたからだともいえよう。

したがって、ここでは民具研究の足跡を回顧する過程から、日本民俗学における民具研究の意義について言及してみたい。また同時に、一般的に言われているように、日本民俗学=柳田民俗学が、民具ならびに民具研究に対して冷淡であったといわれてきているが、その点に関するも言及したいと考えている。

「民具」の概念について

最初に「民具」の概念について考えてみたい。今日でいうところの「民具」という言葉は、渋澤敬三によって造語された。^{注(3)} 渋澤は、民具と称する以前は、民俗品と呼んでいた。人類学の黎明期である明治時代には、民具は土俗品と解されていたが、渋澤はこの土俗という語を嫌っていたので、民俗品という語をあえて用いたらしい。周知のように、渋澤は大正10年にアチック・ミューゼアム Attic Musseum を創設して、今日でいう民具の類いを蒐集していたので、必然的に民具の概念を規定せざるを得ないような情況になっていた。

昭和5年、アチック・ミューゼアムでは、早川孝太郎が中心となって、「蒐集物目安」^{注(5)}を作り、民具の収集・調査・保存を積極的に推進させた。この目安をもとにして、昭和11年に刊行された『民具蒐集調査要目』によると、民具は、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」と明確に規定されている。これは、民具を具体的に定義したもののは嚆矢といえるだろう。この規定も現在では不都合な面がいろいろとでできている。^{注(6)} 最近では、宮本常一をはじめとして、民具研究を精力的に構築してきている研究者が民具を規定している。

とりわけ、宮本常一 桜田勝徳とともに、渋澤の死後、渋澤の遺志にそうした民具の概念

規定の必要性に気づき、そのことに関する断片的なものの記録を試みたが話し合ひだけで終わり、ついに日の目を見なかった。^{注(8)}その後、宮本は、それを骨子として、民具に対する定義を整理してまとめた。それによると、民具は、(1)有形民俗資料の一部である、(2)人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない、(3)民衆がその生産や生活に必要なものとして作り出したもので、使用者は民衆に限られる。専門職人の高い技術によって作られたものはこれまで普通、土芸品などといわれ、多くは貴族や支配階級の人びとによって、用いられた。これは民具と区別すべきである、(4)その製作に多くの手続きをとらない。専門の職人が作るよりも、素人または農業、林業、漁業などのかたわら製作しているものである、(5)人間の手で動かせるものである、(6)素材になるものは草木、動物、石、金属、土などで原則としては化学製品は含まない、(7)複合加工を含む場合は仕あげをするものが、素人または半玄人であるもの、^{注(9)}と定義している。今日では、この定義が民具を研究する者に一番受け容れられている考え方といえよう。

宮本馨太郎は、民具を「一般民衆が日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造型物の一切を包含し、国民文化または民族文化の本質と変遷の解明のために欠くことのできない資料である」と定義している。中村たかをは、「一般庶民がこれまで使ってきた生活用具、ないしは一般民衆の中に伝られて来た生活用具」と規定している。^{注(10)}岡正雄は、「一般に物質文化ともいわれるもので、特に近代的民族社会における、近代的機械文明の影響を蒙らない、民族的な伝統的な生活用具である」と規定している。^{注(11)}潮田鉄雄は、「人間生活における生産・加工・消費の物質文化の一つに過ぎず、生活行為の補助手段として、手足の延長として用いられる」と規定している。^{注(12)}田原久は、「一般国民がその生活の必要のために伝承して用いて来た諸道具」と広く解釈している。^{注(13)}民具を、道具として捉える=有形民俗資料の一部、または、民俗資料として大きく捉える場合があるが、前者が民具を研究する者たちに認識されている定義だといえよう。筆者は民具を広義に解釈して、民俗資料のうちで、とりわけ有形民俗資料（物質文化）が、民具の概念にあてはまる^{注(14)}と考えている。

民具研究の軌跡

わが国における民具（物質文化）の研究は、人類学・土俗学の黎明期である明治時代にはじまった。なかでも、坪井正五郎によって、年始風俗・小正月行事の調査研究がすすめられ、削り掛けが当時の研究者の注目を浴びた。^{注(15)}この時期は、多くの研究者が、物質文化に深い関心を寄せていることは興味深い。ことに坪井は、民具（物質文化）の研究に率先して取組み、今日ある東京大学人類学教室の民具コレクションの基礎をさずいた。^{注(16)}坪井の門下生であった鳥居竜藏は、その影響を大いに受けて、東亜諸民族の民具研究に前人未踏の足跡を残した。^{注(17)}いずれにしても、明治時代における民具の研究は、東京人類学会の会員によつて些少ながら進められてきた。

大正2年に、柳田國男と高木敏雄が雑誌『郷土研究』を創刊し、今日の民俗学研究が本格的に胎動した。宮本馨太郎によれば、「…柳田先生によって地方生活誌の研究が指向さ

れたが、民具の研究は大正期を通じて停滞してしまった」となるが、宮本勢助の服飾調査、^{注09}今和次郎の民家調査などがこの停滞期に光彩を放っている。

大正10年、渋沢敬三らは、アチック・ミューゼアム・ソサエティを作り、玩具研究をはじめた。翌年、アチック・ミューゼアムと改称し、玩具の収集や研究をつづけた。^{注10}このアチック・ミューゼアムが、昭和に入ると、本格的な民具の調査や研究を活発にはじめる。

昭和5年、アチック・ミューゼアムでは、早川孝太郎が中心となって、「蒐集物目安」を作成して、民具の収集・調査・研究に務めた。翌年、「民具図彙」編纂の計画が起り、アチック・ミューゼアムの活動が本格的になってきた。^{注11}昭和9年、アチック・ミューゼアムの調査旅行で、薩南諸島へ俊英の研究者をはじめ、第一線の学者などが多数、参加し、当時としては画期的な学術調査であった。^{注12}その調査をきっかけに、多くの村を訪れ、民具を収集してきた。

このアチック・ミューゼアムが最初に試みた本格的な民具研究は、昭和10年にはじめた足半草履の研究であった。^{注13}足半草履347点を分類、計測した。さらに実物の解体またはレントゲン撮影の方法も駆使して研究がなされた。研究内容は、足半草履の概念および摘要、標本資料の計測・構造・鼻緒結びの呼称、製作工程、文献資料の収集・史的考察・名称の種類と分布、用途及び民俗であり、それぞれが分担して行われた。^{注14}

この研究は、アチック・ミューゼアムに収集された資料の中で、比較研究を可能する程、数量的、分布的に多いものが選ばれ、研究対象になっている。

昭和12年、「民具図彙」に代って、『民具問答集』が出版された。これからは、アチック・ミューゼアムが志向する民具研究や研究態度について知ることができる。この巻末には、「蒐集物目安」の分類を改めた『民具蒐集調査要目』が附録としてつけられている。

この年、民具の収集で狭隘な状態にある新館（昭和8年建築）から、アチック・ミューゼアム収蔵品の一部を、新しく保谷に建てた研究所に移して、これとともに日本民族学会に寄贈した。ただちに日本民族学会は、ここに移転し、附属民族学研究所を創設し、研究活動を開始する。^{注15}これは渋沢が考えていた新博物館構想が高橋文太郎の協力によって実現したものであった。この研究所が中心になって第二次世界大戦後まで、日本周辺の諸民族の調査研究が精力的に進められ、同時に民具の収集もなされた。^{注16}また国内における民具の調査・研究も画期的であった。^{注17}

アチック・ミューゼアムも、その間、民具の収集・調査がなされ、特に笠の収集と、調査、オシラ様の調査・研究は研究の成果が大きかった。^{注18}昭和18年に、アチック・ミューゼアムは、日本常民文化研究所と改称され、戦争などの影響で次第にその活動も中止する状態になってしまった。

戦後、本格的な民具研究は、八幡一郎の農具の研究、宮本馨太郎の運搬具などの調査研究であった。^{注19}その後、注目される研究には、額田巖による結びの技術、中村たかをによる竹細工や木工の技術、潮田鉄雄による田下駄や履物など、がある。^{注20}昭和37年、保谷にあつた民族学博物館の収蔵民具はすべて、文部省史料館収蔵庫に寄贈され、民族学博物館は廃館となつた。

昭和38年、日本における民具研究の指導者であった渋沢敬三が逝去され、多くの功績に対して日本常民文化研究所同人が、『絵巻物による日本常民生活絵引』（全5巻）と、『日本の民具』（全4巻）の刊行を企画した。^{注21}

この年、物質文化研究会が創設され、研究誌である『物質文化』が創刊され、昭和43年には、日本常民文化研究所の編集で『民具マンスリー』が発行された。この新しい波が、不振期にあった民具研究を陰ながらもりたててきた功績はきわめて大きいといえよう。

昭和50年に、日本民具学会が組織されるにあたって、民具研究の隆盛期を迎えてきたようである。ここには、全国各地に散在して民具研究を地道に進めてきた研究者が招集されて、そのエネルギーの結集によって、民具研究への方向性を構築しようとする息吹を感じられる情況があった。またその背後には、昭和25年に制定された「文化財保護法」によってもたらされた恩恵もはかりしれないほどあり、その影響が及んでいるといえよう。

昭和29年、同法が改正されると、「重要民俗資料指定基準」および「記録作成等の措置を構すべき無形の民俗資料選択基準」が告示され、民俗資料の調査、記録、指定が進められた。^{注60} とくに昭和35年以後、高度成長経済による社会の発展に伴ない生活などが著しい変化をこうむり、民俗資料の滅失も急激であった。こうした民俗資料の収集、保存、活用の拠点として、博物館、郷土館、資料館などが全国各地で建設されるようになり、昭和45年度からは、国によって「地方歴史民俗資料館」の建設費補助の道が開かれた。また、昭和49年には、「国立民族学博物館」が創設され、つづいて、最近、「国立歴史民俗博物館」が創設された。

こうした情勢のもとで、一時期低調であったといわれる民具研究も地方から次第に活発化し、その研究成果が続々と発表されている。^{注61}

ここまで、民具研究の歩みを俯瞰してきたが、次に民俗学と民具との関係を、柳田國男と渋沢敬三との関係から捉えて、柳田が民具に強い関心を抱いていたことをあきらかにしてみたい。

民具研究における柳田國男と渋沢敬三

柳田國男は、今日でいう民具および民具の研究を軽視したといわれているが、実際はどうであったのだろうか。確かに柳田は、表面上、渋沢敬三のように、民具に対して関心を如実にはあらわさなかった。このことは、柳田が渋沢に遠慮して、民具のことは任かせていたからであろうか。それとも、柳田は民俗学における精神的民俗事象だけに強い関心を抱き、物質的なものには関心を示さなかつたのであろうか。

この辺のことを理解する上で有賀喜左衛門の発言は注目に値する。有賀によれば、「日本における民具の研究は言うまでもなく、日本民俗学の開拓・育成者としての柳田國男の常民生活の研究にその源を持つ、柳田は日本において最も早く民具に注目した一人であるが、彼自身は民具そのものを研究したというより、むしろ「常民」の信仰やその他の風習の中で用いられた民具に注目したという方が正しいであろう」と言及している。さらに「渋沢は柳田の主唱した民俗学という新しい学間に傾倒したが、その中でも柳田が拓き残した民具研究の分野に特に強い関心を持った」と指摘している。有賀が指摘していることは、確かにその通りだと言えよう。

柳田は、渋沢が自分の拓き残した民具研究の分野に力を注いでくれるので、民具そのものの研究を渋沢に委ねることによって、自分自身は日本民俗学を學問として独立させるた

日本民俗学と民具研究の歩み

注(52)

文献・年譜など 年(元号)	柳田國男と日本民俗学	渋澤敬三と民具研究
明治 8 29 33 43	<ul style="list-style-type: none"> ●柳田國男生まれる ●東京帝国大学卒業、農務省に勤務 ●『遠野物語』出版。郷土会創立 	<ul style="list-style-type: none"> ●渋澤敬三生まれる
大正 2 3 6 10 11 14	<ul style="list-style-type: none"> ●雑誌『郷土研究』創刊 ●白芽会結成 ●国際連盟統治委員としてジエネーブへ(欧洲各地の博物館見学) ●『民族』創刊 	<ul style="list-style-type: none"> ●柳田とはじめて会う ●東京帝国大学卒業、横浜正金銀行に勤務。第1回アチック会合 ●ロンドン支店へ転任(博物館見学) ●アチック・ミューゼアムで、民具蒐集
昭和 5 8 9 10 11 12 14 17 19	<ul style="list-style-type: none"> ●第1回木曜日会。山村生活調査はじまる ●民間伝承の会。『民間伝承』発刊 ●「運搬技術の変遷」について 演 ●海村生活調査はじまる ●『木綿以前の事』出版 ●『火の昔』出版 	<ul style="list-style-type: none"> ●「蒐集物目安」 ●アチック・ミューゼアム新館へ ●薩南十島調査(アチックの調査旅行はじまる) ●足半草履の研究 ●日本民族学会附属民族研究所設立。『民具蒐集調査要目』 ●『民具問答集』出版 ●アチック、日本常民文化研究所と改称
21 22 24 25 26 27 28 32 33 36 37 38 40 41 43 44 45 49 50 55 57	<ul style="list-style-type: none"> ●『先祖の語』出版 ●民俗学研究所創設 ●『北小浦民俗誌』刊行 ●離島生活調査はじまる。九学会連合対馬調査 ●『民俗学辞典』刊行 ●文化財保存審議委員となる ●『海上の道』出版 ●柳田死去 	<ul style="list-style-type: none"> ●(財)日本常民文化研究所設立。文化財保護法制定 ●『日本社会民俗辞典』刊行 ●『鎌図集』 ●文化財保護委員会の民俗資料実態調査はじまる ●『日本民俗学大系』刊行。『日本の民具』(角川書店) ●渋澤死去。『物質文化研究会』設立、『物質文化』発刊 ●『絵巻物による日本常民生活絵引』刊行 ●『日本の民具』(慶友社) ●『民具マヌスリー』発刊 ●『日本民俗資料事典』。『南九州の民具』。『民具入門』 ●地方歴史民俗資料館構想 ●『民具』(現代のエスプリ)。国立民族学博物館創設 ●日本民具学会設立 ●『紀年銘民具目録・図録』

めに没頭できたのであろう。そのせいであろうか、民具に早くから注目して柳田は、一方では、民具研究に対して、外側から援助を与えていた。その一つのあらわれとして、柳田は、大正6年にわが国における各地の古い民家を保存する主旨で白芽会を設立する発起人のひとりになっていることをあげることができる。さらに、柳田が、「炉辺叢書」の一篇に、宮本勢助の山榎研究を加えたい意向を持っていたことや、年譜からもわかるように、大正11年から12年にかけて国際連盟委任統治委員会の仕事のために渡欧した際、大英博物館をはじめとして、積極的に多くの博物館を見学していることなどからもうかがえるであろう。

また柳田は、著作や講演の中で「民具」という語句を使用していないが^{注68}、「有形文化」と語を用いている。この「有形文化」という語が、柳田にとって、「民具」という語にあたったのではなかろうか。柳田は、「有形文化」という語を、渋沢が「民具」という語を造る以前から用いていたと考えられる。

柳田は、民俗学の研究目的とその方法について具体的に著わした『民間伝承論』の中で、「有形文化」について、「一例をいふと常民の衣食住、是に伴ふ長い間の仕込みの如きは、もとは余りにも有りふれた現象として、英國などでは是を省みようとする者が無く、僅かに奇抜意外なる習慣、もしくは迷信が是と結び付いた場合のみに、之を問題にしようとしたのである。所謂有形文化の種々相まで、フォクロアが取扱ふべきであるか否かは、此頃かの国でも漸う問題にし始めて居る」、と述べ、柳田自身が「有形文化」について関心を持っていることを示唆している。また、柳田は、「有形文化」を「第一には目で見たもの、写真にとれるもの又は品物の持つて来られるもの、是が一ぱん得やすいので、順序として先づ注意することにして、之を有形文化などといふ名で呼んでいます」、と明解に規定している。^{注69}

ここで柳田と渋沢についての関係について考えてみたい。日本民俗学を創設した柳田に渋沢は深い尊敬の念を抱いていた。渋沢は、柳田との間に一定の距離を保持しながら、柳田の学問に早くから関心を持っていた。柳田は明治8（1875）年生まれで、明治29（1896）年生まれの渋沢より21歳も年長であった。そんなことからも、渋沢は生涯にわたって、柳田を学問の先輩として尊敬したのであろう。

柳田と渋沢を結びつける要因として、両者が血縁関係に似た関係にあったことがあげられる。渋沢の義理の伯父の穂積陳重という人は法律学者で、渋沢の学問的開眼に少なからずも影響をあたえていた。もちろん、柳田も穂積の書物から大きな影響を受けていた。さらに柳田が参加していた「郷土会」は、新渡戸稻造が主宰しており、その新渡戸が渋沢家と親戚同様のつき合いをしていた。その上に、渋沢の親友であった矢田部兄弟の母は柳田夫人の姉にあたり、渋沢の中学時代からの親友である中山正則の夫人は、柳田夫人の姪であった。

こうした関係から、渋沢が早くから柳田の学問的土壤や気風などに馴染んでいたことは容易に想像がつく。その渋沢が、柳田にはじめて逢ったのは、大正3年4月、渋沢が矢田部達郎らの友人と奥多摩に出かけた帰途の汽車の中であるといわれている。河岡武春は、「今から実証は困難だが、私はこの時期から余り遠からぬいつか、正式に石黒の紹介で新渡戸邸での郷土会に出席して正式の「見参」をしているのではないか」と推定しているが^{注70}、筆者もそのように考えたい。

渋沢は大正11年9月から大正14年8月まで横浜正金銀行ロンドン支店に勤務し、その間、ヨーロッパ各地を旅行した。特に大英博物館をはじめ、多くの博物館を見学し、民族学に強い関心を持つと同時に、民具への本格的研究を考えたのではなかろうか。折しも、先述したように、柳田も同時期にヨーロッパを歴訪し、博物館を見学している。ふたりは、ロンドンで邂逅^{注40}しており、渋沢は進むべき道をそこで発見したのではなかろうか。

渋沢より一足先に日本に帰国した柳田は、大正12年の暮に自宅で民俗学に関する第1回談話会を開いた。そこには、早川孝太郎、岡正雄、宮本勢助などが参会している。大正14年には、渋沢の経済的援助を受けて、雑誌『民族』を創刊している。この時期から、昭和10年に雑誌『民間伝承』を発刊して、民俗学研究者の組織が全国的に至るまでは、柳田と渋沢との間で、人事交流が盛んであったようである。例えば、柳田は、早川・岡を渋沢に紹介したり、渋沢と二高で同級であった有賀が『民族』の編集に参画している。それ以降の柳田と渋沢は、かたやは民俗学の、かたやは民族学の組織者として、お互いに尊重しながら、学問の発展に寄与していった。こうした関係や情況から、柳田は、渋沢に民具研究を全面的に委ねるようになったのであろう。

さて、先述したように柳田は、民具や民具研究に対して無関心でなく、むしろ強い関心を持っていたが、渋沢の出現によって、その志は渋沢に受け継がれたといつても過言ではないであろう。また、柳田が農具に対して深い知見を持っていたことはあまり知られていない。柳田の志を受け継いだ渋沢には、「きわめて実証的であり、しかも民俗品の一つ一つの系譜を辿っていくことだけでなく、その背後にどのような生活があるか、物と人間とがどのようにからみあい、また人に使用されているかを有機的に見ようとした」姿勢が学問の根幹に流れていた。^{注41} 渋沢には、小島櫻禮も指摘しているように、構造主義の考え方^{注42}が根底にあったようである。こうした見方があったからこそ、渋沢は民具研究へ自信を深めたであろうし、柳田は安心して民俗学の中でも精神文化の分野を中心に進むことができた。

日本民俗学における民具研究—結びに代えて—

ここまで、民具の概念、民具研究の軌跡、民具研究における柳田國男と渋沢敬三という三つの角度から、わが国における民具および民具研究に関して展開してきた。そこで、最後に日本民俗学の立場から、民具をどのように研究していくべきかについて、若干の私見を交えながら言及してみたい。

最初に、私は民俗学の範疇から民具を研究していく立場をあきらかにした。では、具体的にどのように研究をすべきなのか。その点に関しては、田原久が明解に述べている。すなわち、「民具はその物自体の觀察にとどまらず、それを必要とした生活様式や技術、さらにそれにまつわる信仰や生活感情というような無形の習俗に裏づけられたものとして見るべきもの」であり、^{注43} 「民具には、地域によって差異があるが、それがそのまま、文化伝播の様相や地域的特性を物語っているものであるから、分布の実相に注意することが必要」であるということになる。さらに、「民具は生活習俗の外的表現、物的表現であって、民具の調査は、生活習俗の調査」であり、^{注44} 「本来あった生活環境の中で捕えることで、民具は本来の生活体の姿に返る」ということになる。まさに、田原が指摘している通りである。

換言するならば、民具（有形民俗資料）＝モノを一つ一つを丹念に調査研究そしてそれを基礎にして比較研究していくだけではなく、民具の背後にはどのような生活があるのかを詳細に調べるとともに、モノ（民具）と人間とがどのように紐帶しているのか、またどのように人間に使用されているのか、というようにモノと人間と社会とを有機的関連で把握することである。すなわち、このようなことを民具誌といえるならば、こうした「民具誌」というものを丹念に積み重ねていくべきだと考えている。こうした視座が「民俗誌」の中に組み込まれるならば、日本民俗学における民俗誌は完璧に近いものになって、私たちがかつて主張してきた「民俗誌」の理念型に到達したものになるだろう。

こういった姿勢で、民具を研究していくならば、民俗学の分野で十分に民具を取り扱うことができ、民俗学において「精神文化」と「物質文化」とが邂逅し、日本民俗学が片肺飛行のような状態を続けなくともいいのではなかろうか。

しかし、筆者は「精神文化」と「物質文化」のどちらか一方だけの研究も認めないわけではない。どちらからでもアプローチができるので、むしろ、両者が互いにそれぞれの立場を尊重し合っていくことが必要であろう。現在では、考古学の成果はもちろんのこと、中世遺物などの発掘も盛んで、各時代間の隙間を埋める発掘資料がどしどし発見される情況なので、民具＝モノの調査研究はきわめて大きい使命を持っているといえよう。

注

- (1) 拙稿「書評 宮本常一著『民具学の提唱』」（『常民文化』第3号、成城大学大学院日本常民文化専攻院生会議、昭和55年3月、60～63頁）の中でも指摘した。
- (2) 民俗学は、精神文化（民俗）と物質文化（民具）の2つの部門を構成している（岡正雄「民具について」、日本常民文化研究所編『日本の民具』、角川書店、昭和33年1月、9～28頁）。
- (3) 宮本常一、『民具学の提唱』、未来社、昭和54年9月、44頁。宮本馨太郎、「民具研究の回顧と展望」、『物質文化』第2号、昭和43年4月、1頁など。
- (4) 宮本常一、前掲書、44頁。
- (5) この時期における早川孝太郎の活躍には、めざましいものがある。最近、発表された伊藤論文は、早川の民俗学方法論の構築過程を論じている。伊藤廣之、「早川孝太郎における民俗学方法論の成立と展開—生活事象の相互関連分析を中心に—」、『大阪市立博物館研究紀要』第14冊、昭和57年3月、1～38頁。
- (6) アチック・ミューゼアム編、『民具蒐集調査要目』（アチック・ミューゼアムノート第7）、昭和11年6月、1頁。
- (7) たとえば、山口賢俊、「民具の定義などについて」、『民具マンスリー』7—10、昭和50年1月、8～12頁。大脇直泰、「民具分類管見」、『民具マンスリー』6—1、昭和48年5月、5～8頁などがある。
- (8) 宮本常一、前掲書、74～75頁。
- (9) 宮本常一、前掲書、76頁。
- (10) 宮本馨太郎、「民具入門」、慶友社、昭和48年2月（2刷）、15頁。
- (11) 中村たかを、「日本の民具」弘文堂、昭和56年2月、3頁。
- (12) 岡正雄、前掲書、15頁。

- (13) 潮田鉄雄、「私の民具学」、米山俊直・田村善次郎・宮田登編『民衆の生活と文化』、未来社、昭和53年8月、253頁。
- (14) 田原久編、『民具』(日本の美術58)、至文堂、昭和46年3月、17頁。
- (15) 宮本馨太郎、前掲書(10)、14頁。文化財保護委員会の「有形民俗資料」とアチック・ミューゼアムの「民具」の語が全く同じ内容のものであるといっている。
- (16) 宮本馨太郎、前掲書(3)、2~4頁。
- (17) 宮本馨太郎、前掲書(3)、3頁。
- (18) 宮本馨太郎、前掲書(3)、3~4頁。
- (19) 宮本馨太郎、前掲書(3)、4頁。宮本常一、中村たかをなども同様の指摘している。
- (20) 宮本馨太郎、前掲書(3)、7~8頁。
- (21) 宮本馨太郎、前掲書(3)、8~9頁。
- (22) 宮本馨太郎、前掲書(3)、10~11頁。この調査には、アチック・ミューゼアムの同人のほか、各大学から地質岩石学・動物学・植物学・農学・人類学・宗教学の教授たちが参加。同人はさらに調査の帰途、隠岐島に立ち寄っている。その他、この年は、各地へ採訪、調査に出かけている。
- (23) 昭和11年、『民族学研究』の第1巻第4号と第2巻第1号に、「所謂足半(あしなか)に就いて〔予報〕」と題して発表された。
- (24) 渋沢敬三、小川徹、磯貝勇、宮本馨太郎、高橋文太郎によって分担され研究を実施した。アチック・ミューゼアム収蔵の足半草履のほか、日本青年館郷土資料陳列所および宮本勢助収集のものを加えている。
- (25) 宮本馨太郎、前提書(3)、12~14頁。
- (26) 宮本馨太郎、前掲書(3)、16頁。
- (27) 昭和14年に、民具の展示と収納が完了し、民族学博物館もオープンした。昭和17年になる時局の要請で、日本民族学会が発展的解消して、文部省に民族研究所が創設された。周辺諸民族の調査研究などについては、宮本馨太郎論文(前掲書(3)、19~21頁)に詳しく紹介されている。
- (28) 『民族学年報』に発表された磯貝勇、小川徹、宮本馨太郎をはじめ、宮本勢助、瀬川清子、小谷方明などの成果があげられる。
- (29) 宮本常一が後藤捷一の協力を得て行なった。オシラサマの被布の染織を問題にしたところが興味深い。
- (30) 宮本馨太郎、前掲書(10)、207頁。文部省科学研究費によって、「我が國庶民生活文化の民族学的調査研究」を昭和25年から3年継続で実施した。
- (31) 昭和40年、角川書店から刊行。
- (32) 昭和41年、慶友社から刊行。
- (33) 昭和50年の文化財保護法の改正で、「民俗資料」が「民俗文化財」と改められた。
- (34) 小野重朗、中村たかを、田辺悟、額田巖、石塚尊俊、上江洲均、泉房子、潮田鉄雄、宮本馨太郎、日本常民文化研究所などの成果がある。最近では、小坂広志によって提唱された紀年銘民具の研究が定着し、成果をあげつつある。
- (35) 有賀喜左衛門、『民具マンスリー』、8~10・11、昭和51年2月、1頁。
- (36) 有賀喜左衛門、前掲書、1頁。

- (37) 宮本馨太郎、「揩衣宮本勢助略伝」、『日本民俗学大系』第6巻、平凡社、昭和33年4月、395頁。
- (38) 柳田は、昭和7年の「食物と心臓」、昭和8年の「郷土研究と郷土教育」、昭和9年の『民間伝承論』などで「有形文化」という語を用いている。
- (39) 柳田國男、『民間伝承論』、共立社書店、昭和9年8月、28頁。
- (40) 柳田國男、「女性生活史」、『定本柳田國男集』第30巻、筑摩書房、昭和45年11月、13頁。この論考は、昭和16年1月から9月まで、『婦人公論』に発表したもの。
- (41) 宮本常一、『渋沢敬三—民族学の組織者—』、講談社、昭和53年6月、79~80頁。
- (42) 宮本常一、前掲書(41)、124頁。
- (43) 河岡武春、「アチックのおもちゃ時代。(其の一)」、『民具マンスリー』9—11、昭和52年2月、17頁。
- (44) 河岡武春、「アチックのおもちゃ時代(その二)」、『民具マンスリー』9—12、昭和52年3月、16~18頁。
- (45) 有賀喜左衛門、前掲書(35)、2頁。
- (46) 宮本常一、前掲書(41)、25頁。
- (47) 小島珂禮、「渋沢敬三と構造主義」、『民具マンスリー』9—10、昭和52年1月、1~3頁。
- (48) 田原久、前掲書(14)、18頁。
- (49) 田原久、前掲書(14)、18頁。
- (50) 田原久、前掲書(14)、107頁。
- (51) 岩崎真幸・鈴木通大・松田精一郎・山本質素、「〈民俗誌〉の系譜」、『日本民俗学』第113号、昭和52年9月、18~19頁。
- (52) この表を作成にするにあたって、柳田國男関係については、鎌田久子作成による『年譜』(『定本柳田國男集』別巻5、筑摩書房、昭和46年6月)、渋沢敬三関係については、宮本常一著『渋沢敬三—民族学の組織者—』の巻末年表を参考にした。